

ジョージアの見どころ

【ジョージア】

北に大コーカサス山脈を境にロシアと、南にトルコ、アルメニア、アゼルバイジャンと接し、西に黒海に面する日本の約5分の1の国土のジョージアは、古くからアジアとヨーロッパの十字路として栄えて着きました。首都トビリシの旧市街には19世紀の街並みが今も残されています。トビリシから少し足を延ばせば、紀元前4世紀から5世紀に王国のあったムツヘタの文化財群や、コーカサス山脈を越えて全長210キロに及ぶグルジア軍用道路の車窓からの壮大な眺めを楽しむことができます。東部の山間部には、ダヴィット・カレジの荒涼とした大地が広がり、東部・中央部にかけて点在する洞窟住居の景観に圧倒されることでしょう。アッパー・スワネティは勇猛な戦士達の子孫が昔ながらの生活を今に伝える人気の世界遺産です。2015年、日本における国名標記が「グルジア」より「ジョージア」に変更になりました。

【トビリシ】

6世紀以降この地を支配した王朝はみなトビリシに都を置きました。トビリシという名前はジョージア（グルジア）語のトビリ（温かいという意味）に由来しているといわれています。現在の旧市街は（北はバラタシュヴィリ通り～プーシキン通り～タヴィスプレバ広場、南はアバノトゥバニの辺り）全域が歴史保存区域で、19世紀の街並みが今も残されています。街はムトゥクヴァリ（キュル）川に沿って北西から南東に広がっています。中心はタヴィスプレバ広場で、18世紀以前からの歴史的な建築物が多く残っています。広場から北は帝政ロシア時代以降に発展した欧風の新しい市街で、北西にのびるルスタヴェリ通り沿いには国会や銀行、劇場などが並びます。ルスタヴェリ駅の西に位置するヴァケ地区はソ連時代に貴族が住んでいた土地で、現在でも山の手に相当し、飲食店なども洗練されています。反対に川の東側のマルジャンニシュヴィリ広場やトビリシ駅のあたりは下町です。中心から離れた北のディドゥベや、南西のサムゴリはさらに下町度が高い地域です。物価はより安く、建物もソ連時代の団地風のものも多く残っています。人口約140万人の都市です。



【ナリカラ要塞跡】

旧市街を見下ろす高台にあり、4～5世紀ごろから砦として活用されていました。19世紀初頭に火薬庫が爆発し、多くの建物が失われましたが、今も教会が建てられて人々が集います。



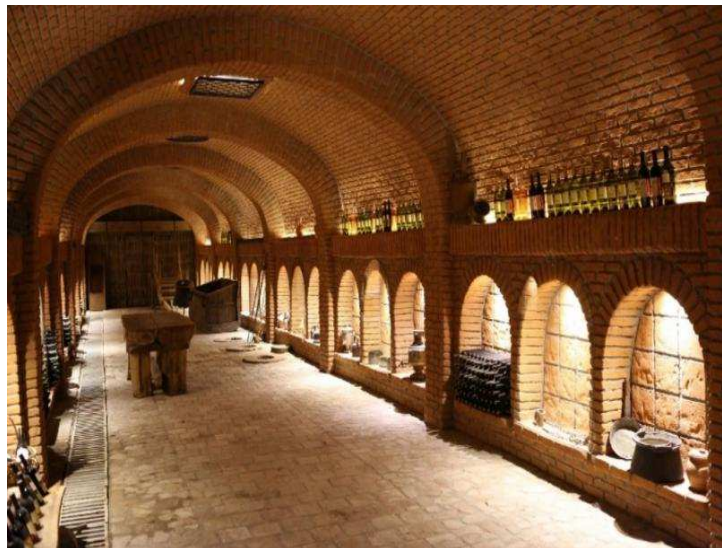
【カヘティ地方 シグナギ】

カヘティ地方の最東端に位置し、シグナギ市の行政の中心となる町で、歴史的・文化的建造物が存在するため、1975年より州によって保護されてきました。この町は18世紀にエクレレ二世国王が建てた城で囲まれています。ここから見えるアラザニ平地や東コーカサス山脈の風景は絶景です。

また、シグナギは“愛の町”としても知られています。

カヘティ地方はワインの一大生産地として有名で、ジョージアはワイン発祥の地と言われてます。

khareba tunnel winery はワインの品質を保つ為、トンネルの中でワインを貯蔵してます。



【ジョージア軍用道路】

トビリシから大コーカサス山脈を越え北オセチア共和国の首都ウラジカフカスまで伸びる全長210キロの道。1799年、ロシア軍が軍用に作ったもので、ロシアとコーカサスの動脈として機能しました。現在は景色が美しいことで知られており、天気の良いと標高5047mのカズベク山をはじめ、コーカサス山脈をご覧になれます。



【ムツヘタ】

1994年に世界文化遺産に指定されました。

首都トビリシの北20キロ、ムトクヴァリ川とアラグヴィ川の合流地点に位置するこの町は教会も多く、町全体が美術館のように美しいたたずまいです。



【ジョージア料理】

ジョージア固有の料理であり、同国内の州ごとに独自に発祥した料理や伝統の中で洗練された料理が数多く存在する。一方、グルジア料理の中には中東やヨーロッパだけではなく、西アジアからの影響も見られる。これらは、この地がユーラシア大陸の東西をつなぐ貿易路の中継点であったため、相互の豊富なアイデアや香辛料を含む食材が行き交った結果と見られる。

